

「モデル小説」からみる
プライヴァシーの近代

日比嘉高

第11回

島崎藤村、写実小説のジレンマ 5 「新生」へ＋まとめ

明治から大正、昭和へ——
藤村の変化、時代の変化を読みとろう。

1 前回のやり残し——「突貫」

1・1 「名のつけやうの無い恐怖」と〈伝説〉の中の亀裂

分析

作品の論理構成から考える

(1) 「旧主人」「藁草履」のエピソードを、〈写す（＝表層）〉／〈精髓（＝深層）〉に振り分けてみる

(2) 「旧主人」「藁草履」のエピソードを、書く・話す／読む・聞くに振り分けてみる

「私は無いものを有るやうに見せる手品師では無い。」

「先生は私に向つて何事も言はない。けれども私はそれを読むことが出来る。」

「私の始めたことは旧師にまで背くやうな結果を持ち来した。その意味から言つても、……去りたいと思ふ。」

↓ 「突貫」は、伝説を形成した作品の一つであると同時に、それに亀裂を入れてしまう作品でもある。

1・2 小説——この「不思議な性質」

◇ 「斯の真昼間、私達の鼻の先で行はれたことを写して、どうしてそれで斯う自分の気が咎めるだらう。」

◇ 「実際の始めたことは斯ういふ不思議な性質のものだ。」

↓ 小さな共同体内での噂話と、小説とは何が違うのか？

(1) 公共性、リアリティ、転形

■引用1 ■ ハンナ・アーレント『人間の条件』（筑摩書房、一九九四年一〇月、原著初版一九五八年）

「第一にそれは、公に現われるものはすべて、万人によつて見られ、聞かれ、可能な限り最も広く公示されるということの意味する。私たちにとっては、現われがリアリティを形成する。〔…〕見られ、聞かれるものから生まれるリアリティにくらべると、内奥の生活の最も大きな力、たとえば、魂の情熱、精神の思想、感覚の

喜びのようなものでさえ、それらが、いわば公的な現われに適合するように一つの形に転形され、非私人化ディソライズされ、非個人化ディペソライズされない限りは、不確かで、影のような類の存在にすぎない。このような転形のうちで最も一般的なものは、個人的経験を物語として語る際に起こる。」(p.75)

(2) メディアとしての近代小説1 出版と流通

- 著作権意識の高まり、「自費出版」の先駆けとしての藤村
- 執筆、出版、流通、享受というプロセスに、当時最も自覚的だった作家

【前回資料】藤村「著作と出版」(『読売新聞』一九二五年五月二五日)

(3) メディアとしての近代小説2 滞留、蓄積

○「最早あの話を読んだ人も忘れる頃だ。」
にもかかわらず、「身を縮めずからだすくに其番小屋の側を通れなかつた。」

↓ 実際そうだったという経験を語っているかもしれないが、「水彩画家」にまつわるモデル問題のタイムラグを経験している藤村が書いていることに注意。

↓ 小説は、出版の形態を変え何度も刊行される。しかも、モノとして長く存続する。

2 「新生」論

▼「新生」「新生事件」について ↓ 別紙・『島崎藤村事典』明治書院

▼「新生」は、《主人公岸本が「懺悔」(＝「新生」)の執筆を思い立ち、発表していく物語》ともいえる。

・ 岸本が告白を思い立つ場面 【資料1】 後編 九十二〜三

・ 告白をためらう場面 【資料2】 後編 百八

・ 「懺悔」が発表され、周囲の反響がある場面 【資料3】 後編 百十五

↓ 「新生」を書くことと、書かれることをめぐる物語として考える。

2・1 書くことをめぐる物語

▼ 書くことをめぐるオーソドックスな解釈

■引用2 ■ 相馬庸郎「『新生』試論」『日本近代文学』一九六九年一〇月

「最後にくる「懺悔」の稿を書くという行為は、このようにしておのれの真実と二人の立たされている矛盾的な場所を見据えるためにまず必要な行為であった。そしてそれを発表するという行為は、おのれの到達した世界を真に客観化するために必然的な行為であった。」

↓ 書くこと＝認識

▼ ジェンダー批評による読みなおし

■引用3 ■ 千田洋幸「性〈書く〉ことの政治学——『新生』における男性性の戦略——」『日本近代文学』一九九四年一〇月

「この小説を〈書く〉ことをめぐる物語として読む、という解釈コードを導入してみる必要があるだろう。『新生』に語られているのは、岸本が自己の近親相姦の体験をえがく「懺悔」という小説を発見する物語、すなわち岸本がペンを獲得してゆくまでの物語なのであり、同時にこの〈書く〉という行為が、ジェンダーとつねに密接にむすびついた形で言説化されている[…]

「すなわち、岸本が「懺悔」を〈書く〉ことは、女を〈犯す〉こと——節子との肉体関係をむすび、反発心を抑圧しつつ懐柔し、自己にとって都合のいい女性像にしたてあげてゆく行為とアナロジーをなすことによって、岸本における男性性の意味を生成する。」

↕ 書くこと⇨男性性の獲得⇨女性の抑圧

2・2 書かれることをめぐる物語

この「抑圧」の問題を女性（ここでは節子）に対する問題にとどまらず、〈書かれる者〉に対する〈書く者〉の抑圧の問題として、拡張して考えてみる。

岸本は、節子の〈ペン〉を奪い客体化することで、原作者の立場を独占する。

⇨

岸本は、〈書かれる者〉の反論の機会を奪い客体化することで、原作者の立場を独占する（確固たるものにする）。

↓「懺悔」への周囲の反響 【資料3】

■引用4 ■ 「新生」後編 百十五

「そうお前達に心配を掛けて、それは俺も済まないと思う。しかし、誰が迷惑するツて言ったって、一番迷惑するのは俺じゃないか」

- 岸本は、自分の表現行為を与えている暴力性に徹底して無自覚である。そしておそらくこれは藤村自身の感覚ともさほど遠くはなかった。
- だが、小説テキストは主たる登場人物⇨知覚者の認識に反する要素をも含みもつ。
- 先の輝子の場面、また次の場面。

■引用5 ■ 「新生」前編、十六

「彼はある新聞社の主筆が法廷で陳述した言葉を思い出すことが出来る。その主筆に言わせると、世には法律に触れないまでも見通しがたい幾多の人間の罪悪がある。社会はこれに向って制裁と打撃を加えねば成らぬ。新聞記者は好んで人の私行を摘発するものではないが、社会に代ってそれらの人物を筆誅するに外ならないのであると。こうした眼に見えない石が自分の方へ飛んで来る時の痛さ以上に、岸本は見物の喝采を想像して見て悲しく思った。昼と夜とは長い瞬間のように思われるように成って行った。そして岸本の神経は姪に負け又自分でも負った深傷に向って注ぎ集るようになって行った。」

岸本は硝子戸に近く行った。往來の方へ向いた二階の欄のところから狭い町を眺めた。白い障子のはまった幾つかの窓が向い側の町家の階上にも階下にもあった。その窓々には、岸本の家で部屋の壁を塗りかえてさえ、「お嫁さんでもお迎えに成るんですか」と噂するような近所の人達が住んでいた。いかなる町内の秘密をも聞き泄すまいとしているようなある商家のかみさんは大きな風呂敷包を背負って、買出しの帰りらしく町を通った。」

● 新聞種にされ「筆誅」されることへの恐怖

- 近所の噂の種にされることへの恐怖

↓ これらは自らの反社会的行為に対して課される制裁への恐怖である
↓ が同時に、〈書かれる側〉の恐怖を触知している場面でもあるだろう。

2・3 大衆文化の時代へ——「新生」とゴシップの関心

「新生」は従来、純文学の枠内において考えられてきた。たとえば次の芥川とのやりとり。

■引用6 ■ 芥川龍之介「或阿呆の一生」『改造』一九二七年一〇月

「……ルツソオの懺悔録さへ英雄的な（うそ）に充ち満ちてゐた。殊に「新生」に至つては、——彼は「新生」の主人公ほど老獪らうくわいな偽善者に会つたことはなかつた。」

■引用7 ■ 島崎藤村「芥川龍之介君のこと」

「芥川君は懺悔とか告白とかに重きを於いてあの『新生』を読んだやうであるが、私としては懺悔といふことにそれほど重きを置いてあの作を書いたのではない。人間生活の真実がいくら私達の言葉で尽せるものでもなく又書きあらはせるものでもないことに心を潜めた上の人で、猶且つ私の書いたものが嘘だと言はれるならば、私は進んでどんな非難に当りもしようが、もともと私は自分を偽るほどの余裕があつてあの『新生』を書いたものでもない。当時私は心に激することがあつてああいふ作を書いたものの、私達の時代に濃いデカダンスをめぐけて鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた。荒れすさんだ自分等の心を掘り起して見たら生きながらの地獄から、そのまま、あんな世界に活き反る日も来たと言つて見たらいつもりであつた。」

この範囲だと藤村の作家としての姿勢や創作法の問題、作品の表現のあり方の検討にとどまる。だが、「新生」の新聞発表は一九一八〜一九一九年（単行本、一九一九）。モデル問題という視座からすれば、以降の大正末期、昭和初期に興隆する大衆文化との関係が重要。「新生」は文学的名作という価値づけが利用されながら、中間層以下に向けたゴシップ的好奇心の中に取り込まれていった。

↓ 【資料4】 『婦人公論』「懺悔物語」号、一九二〇年一月、目次

↓ 【資料5】 「悲劇の自伝」『婦人公論』一九三七年五月、六月

3 藤村とモデル問題のまとめ

- 二〇世紀初頭における文壇小説のリアリズムへの旋回

● 取材範囲の身边への狭隘化 ↓ 「謀者の眼」の時代の到来へ

- 文芸メディアの成長

- モデル問題の発生

● 「作家—読者—メディア」の狭い範囲の情報共有を要件とする「文壇」の成立、文壇小説・私小説へ

● 「プライヴァシー」意識はあつた。しかし文学的関心の範囲外

- 「事実」への興味の抑圧と回帰

● 藤村の作家としての個人史は、こうした歩みと共にあつた。作風の変遷（リアリズムから暗示へ）。書くことへの信仰と献身、それと裏腹な盲目。書かれることへの無自覚と知覚の共存。